



学内広報

No.1298

2004.10.13
東京大学広報委員会



次期総長に決まった小宮山宏理事・副学長の会見（2ページに関連記事）

CONTENTS

一般ニュース	2	掲示板	8
総長予定者決まるー第28代総長に小宮山宏理事・副学長ー、総長予定者決定に伴う記者会見行われる、平成16年度東京大学ホームカミング日の開催		AGSテクニカルミーティングの開催案内、第2回レーザーアライアンスシンポジウム開催のお知らせ、ASNET（東京大学日本・アジア教育研究ネットワーク）シンポジウム「ASNETの将来計画」開催のお知らせ、一般公開講演会「素粒子物理の最前線」開催のお知らせ、『デジタルとミュージアム』展展示のお知らせと内覧会・レセプション開催の報告、秋季データベース講習会のお知らせ	
部局ニュース	3	事務連絡	12
歴史の中の共和主義ー福田有広氏追悼シンポジウム・レセプションが行われる、東大病院が秋の全国交通安全運動に協力、教育学部附属中等教育学校後期課程野球部が東京都高等学校秋季軟式野球大会優勝、平成17年度大学院学際情報学府修士課程入学試験結果について、第13回原子力研究総合センター技術発表会が開催される、第7回年次シンポジウムを開催		人事異動（教員）	
		訃報	14
		溪内謙名誉教授、古賀憲司名誉教授	
		淡青評論 三極構造の外側	16

総務部

総長予定者決まるー第28代総長に小宮山宏理事・副学長ー

佐々木毅総長の任期満了に伴う次期総長予定者の選挙の投票が9月27日（月）午後行われた。投票は第2回目で終了し、その後の総長選考会議で選挙結果を受け、小宮山宏理事・副学長が総長予定者に決定した。

森巨総長選考会議議長は、この決定を小宮山理事・副学長に伝え、受諾を要請したところ、小宮山理事・副学長はこれに応ずる旨答えた。森議長は、同会議にこれを報告し了承を得た。その結果、平成17年4月1日（金）から4年間、小宮山理事・副学長が第28代総長に就任することとなった。

本年4月の国立大学法人化に伴い、「東京大学総長選考会議規則」等の関係規則制定後、初めての総長選考であり、諸規則に則り選考が行われた。

第2回目投票結果は、次のとおりである。

有資格者総数	2,202
投票総数	1,403
有効投票数	1,394
この過半数	698
白票・無効投票数	9
(五十音順)	
小宮山 宏	769
佐々木 毅	536
西尾 茂文	89
計	1,394

総務部

総長予定者決定に伴う記者会見行われる

9月28日（火）17時30分からおよそ60分間、薬学系総合研究棟講堂において、総長予定者決定に伴う記者会見が行われた。



小宮山宏理事・副学長と森巨議長（第23代総長）

記者会見は、佐久間一郎広報委員長の司会により、森巨総長選考会議議長の報告に続き、総長予定者に決定された小宮山宏理事・副学長が、記者の質問に答える形で進められた。



記者会見の様子

学生部

平成16年度東京大学ホームカミングデイの開催

平成16年度「東京大学ホームカミングデイ」が11月13日（土）に開催されます。

「東京大学ホームカミングデイ」は、過去2回の開催では、同窓会連合会が主催していましたが、今年度から本学が主催し、同窓会連合会が共催という運営形態に切り替え、より多くの卒業生の方々に盛りだくさんの企画を用意しています。

企画内容の一部を紹介すると、①大学学部施設見学、②各学部イベント（講演会・懇親会など）、③現役東大生によるキャンパスツアー、④現役学生・卒業生の混合チームによる対抗試合、⑤東大卒業生でもある加藤登紀子さんのコンサートなどです。

参加対象者は、学部卒業生・大学院修了者、学生、教職員、同伴家族、同伴友人、クラス会・旧ゼミ生等の団体で、案内状については、卒業10年目ごとの卒業生の方々に送付しています。

この件に関するお問い合わせは、学生部厚生課卒業生係（TEL：03-5841-1211）までお願いします。

URL： <http://www.u-tokyo.ac.jp/>

大学院法学政治学研究科・法学部
歴史の中の共和主義－福田有広氏追悼シンポジウム・レセプションが行われる

大学院法学政治学研究科附属比較法政国際センターと21世紀COEプログラム「先進国における《政策システム》の創出」共催により、9月29日（水）に第18回比較法政シンポジウム「歴史の中の共和主義－福田有広氏追悼シンポジウム」及びレセプションを開催した。

シンポジウムは法学部4号館会議室で約60名の参加者を得て開催され、第1部は加藤淳子教授の司会により、高橋進教授（同COE拠点リーダー）が本シンポジウムの開催に至るまでの経緯について、昨年11月16日（日）急逝した故福田有広助教授が本年3月に計画していたシンポジウムの遺志を引継ぎ、学内・学外の多くの方々の協力を得て実現したと説明し、感謝の辞を述べた。また、犬塚元日本学術振興会特別研究員が故福田助教授の研究歴・業績を紹介した。



高橋教授の挨拶

第2部は蒲島郁夫教授、加藤淳子教授の司会により、ロベルト・ファルネーティ ボローニャ大学研究員、キンチュ・ヒュークストラ オックスフォード大学講師、ペーター・シュレーダー ロンドン大学ユニヴァーシティカレッジ講師、川出良枝東京都立大学教授が報告を行い、安武真隆関西大学助教授、松本礼二早稲田大学教授がコメントを行った。フロアからも質問や意見が活発に述べられた。

またシンポジウム後、会場をフォーレスト本郷バンケットルームに移したレセプションは谷口将紀助教授の司会により進められた。故福田助教授の指導教官であった佐々木毅総長の挨拶と高橋宏志本研究科長の献杯、杉田敦法政大学教授及び加藤淳子教授のスピーチが行われ、スケジュールを調整して来日した3人の研究者たちを含む故人を偲ぶ人々の想いが伝わるレセプションとなった。高橋進教授の挨拶により閉会した。



シンポジウム会場の様子



佐々木総長の挨拶

医学部附属病院
東大病院が秋の全国交通安全運動に協力

医学部附属病院では、本富士警察署長から秋の全国交通安全運動への協力要請を受けて、9月22日（水）に文京区本郷4丁目の櫻木神社前で、看護部長はじめ看護職員5名が信号待ちする車やバイクのドライバーに、秋の味覚「ナシ」と交通安全のチラシを配って「交通事故なしでよろしくお願ひします」と呼びかけ、交通事故の防止をPRするキャンペーンを行った。



街頭での交通安全キャンペーン記念撮影

キャンペーン終了後、本富士警察署長から看護部長へ警視庁のシンボลมスコット「ピーポくん」が贈られ、医学部附属病院では今後とも全国交通安全運動に積極的に協力することとした。



街頭での交通安全キャンペーンの様子



ドライバーにナシを配って「交通事故なし」をPR



本富士警察署長から「ピーポくん」の贈呈

大学院教育学研究科・教育学部

教育学部附属中等教育学校後期課程野球部
が東京都高等学校秋季軟式野球大会優勝

8月下旬から始まった支部大会と、支部代表15校が9月から熱戦を繰り広げた都大会を見事勝ち抜いて、教育学部附属中等教育学校後期課程野球部が12年ぶりの優勝を果たした。

硬式野球部がある強豪校（成立、創価、日大三、修徳高校）がここ数年優勝を独占する中、国公立校の代表として、頂点に立つことができたことは高い評価に値する。

昨年の春季大会で20年ぶりに優勝をした当時の1年生部員たちがこの時の経験を引き継いだことも大きな勝因の一つであろうが、なんと言っても部員13名のチームがここまで勝ち上がることができたのは、彼らの熱心な練習と数多い練習試合の賜物である。

なお、準優勝の修徳高校とともに、11月5日（金）から神奈川県相模原市で行われる関東大会に東京都代表として出場することが決まっている。

大会結果（参加78校）

（支部大会）

- 1 回戦 対 帝京高校 17-0
- 2 回戦 対 日本学園高校 7-0
- 3 回戦 対 都立小石川工業高校 6-3（支部代表決定）

（都大会）

- 1 回戦 対 成立学園高校 4-1
- 2 回戦 対 国土館高校 12-0
- 準決勝 対 創価高校 6-5
- 決 勝 対 修徳高校 3-1



優勝したチーム一同

平成17年度大学院学際情報学府修士課程入学試験結果について

大学院学際情報学府は、平成17（2005）年度修士課程入学試験一次試験（筆記試験）を8月24日（火）に、二次試験（口述試験）を8月30日（月）及び31日（火）に実施し、9月3日（金）に合格者を発表した。志願者数及び合格者数は、下表のとおりである。

平成17年度大学院学際情報学府修士課程入学志願者数・合格者数

コ ー ス	受入予定人員	日本人／外国人	志願者			合格者		
			本学	他大学	計	本学	他大学	計
社会情報学	約20	日本人	8	65	73	7	14	21
		外国人		12	12		4	4
		計	8	77	85	7	18	25
文化・人間情報学	約30	日本人	10	46	56	4	24	28
		外国人		6	6		2	2
		計	10	52	62	4	26	30
学際理数情報学	約20	日本人	13	18	31	12	8	20
		外国人						
		計	13	18	31	12	8	20
合 計	約70	日本人	31	129	160	23	46	69
		外国人		18	18		6	6
		計	31	147	178	23	52	75

原子力研究総合センター 第13回原子力研究総合センター技術発表 会が開催される

原子力研究総合センター主催の技術発表会が9月13日(月)13時30分より開催された。技術発表会は、技術職員相互の交流と技術水準の向上をはかるために毎年開催されており、今年で13回目を迎えた。はじめに中澤正治センター長(技術部長兼任)の開会挨拶をいただき、引き続き以下の題名で発表が行われた。

1. 後方散乱分析装置の歩み
(共用設備管理部門 森田 明・伊藤誠二)
2. 東大タンデムと名大年代測定総合研究センターとの標準試料クロスチェック
(タンデム加速器研究部門 土屋(春原)陽子)
3. 短絡時ノイズの特徴と対策
(共用設備管理部門 安本 勝)
4. 排水中のホウ素濃度とその分布
(全国共同研究部門 澤幡浩之)
5. 話題提供： ^{14}C による海洋性冷湧水起源炭素酸塩の沈殿様式解明へのアプローチ
(タンデム加速器研究部門 研究機関研究員 加藤和浩)
6. MALT5UD加速器の加速管内ガス成分の測定
(タンデム加速器 中野忠一郎)
7. 放射化分析用自動試料交換システムの開発
(全国共同研究部門 石本光憲)
8. 高温質量分析計のクヌーセンセルへの対策；正確な蒸気圧測定のために
(共用設備管理部門 安本 勝)

活発な議論を経て、有意義な発表会となった。終了後には懇親会があり、親睦を深めた。



発表会の様子

空間情報科学研究センター 第7回年次シンポジウムを開催

9月10日(金)、山上会館にて、空間情報科学研究センターの第7回年次シンポジウムが開催された。年次シンポジウムは、年度ごとに共同研究の成果を発表し、センターの活動内容と方針に関してオープンに意見をいただくことを目的としている。また、空間情報科学に関係する優秀な研究者を招いてご講演いただき、センターの将来の活動方針に生かすことも目的としている。第7回年次シンポジウムでは、以下の研究発表が行われた。

<午前のセッション>

空間情報科学から展開する多様な研究活動

- 1) GISを利用した旧版地形図からのメッシュ人口推定
荒井良雄(東京大学)
- 2) アフリカ地域研究とGIS
荒木 茂(京都大学)
- 3) 空間疫学分析における統計解析環境Rの活用
谷村 晋(長崎大学)
- 4) 京都バーチャル時・空間
矢野桂司(立命館大学)

<午後のセッション>

最新地図学と空間情報デザイン

- 5) 空間情報デザイン
ー現実空間とデジタル空間の融合設計ー
松本文夫(プランネット・アーキテクチャーズ)
- 6) A Strategic Plan for ICA (International Cartographic Association) and its Implementation
Milan Konecny (国際地図学会会長、Masaryk大学、チェコ共和国)
- 7) ユビキタスマッピング
森田 喬(法政大学)
- 8) Animation in GIS: Discovering New Patterns in Space and Time
Michael Peterson (ネブラスカ大学、アメリカ合衆国)
- 9) SVG for Interactive Webmapping: State of the Art, Usage Scenarios and Future Enhancement
Andreas Neumann (スイス連邦工科大学、スイス連邦)

午前のセッションでは、明治期の人口推定、アフリカを中心とした地球史の推定、免疫学における時空間解析、時間移動可能なデジタル京都の構築、などに関して有意義な発表が行われた。午前中の4件の発表に共通することは、空間に加えて、時間軸を取り扱うシステムやコン

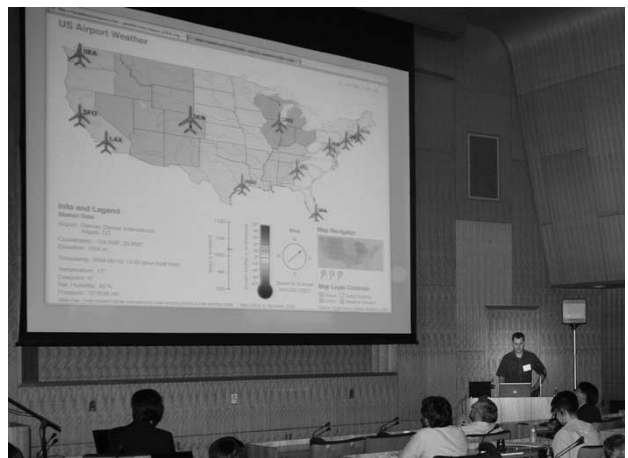
テンツが本質的に意味のある研究につながるという点であり、空間情報科学の現在の焦点が明らかになったといえる。

午後のセッションでは、ITによる地図学の新发展と情報デザインの空間情報科学への応用に関する発表が行われた。国際地図学会（ICA）会長のMilan Konecny教授（Masaryk大学、チェコ共和国）からは、歴史と伝統のある地図学とIT社会から生まれた空間情報科学との協調発展が、ICAにとって今後最重要課題になるという主旨の講演がなされた。また、Webの国際標準化機関であるW3Cが制定したSVG（Scalable Vector Graphics）を基本にした、インターネット上での地図の新しい利用の枠組みとしてWebmappingがあるが、このWebmappingの世界的第一人者であるスイス連邦工科大学のAndreas Neumann氏にもご講演いただいた。インターネットで利用できる、美しく、柔軟性や対話性があり、リアルタイムの情報を反映するWebmappingの原理と将来性に関して、魅力的な実演を交えての講演であった。

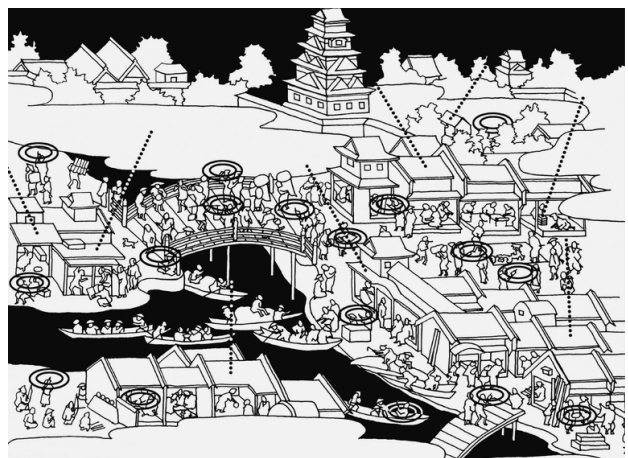
このシンポジウムには国内外から約180名もの参加者が集まった。空間情報科学の最新研究に対する関心度の高さを示すものといえるだろう。その内容も国際色豊かなものであった。このシンポジウムに連携して、9月7日（火）～9日（木）に、ICAおよび空間情報科学研究センターが中心となって、国際ワークショップUPIMap2004（International Joint Workshop on Ubiquitous, Pervasive and Internet Mapping）も開催された。UPIMap2004は、W3Cが主催する国際会議SVG Open2004とも協力開催であった。



国際地図学会会長 Milan Konecny教授の講演



スイス連邦工科大学のAndreas Neumann氏によるWebmappingに関する講演



日本におけるユビキタスマッピングのイメージ図
（制作：松本文夫、協力：森田喬、有川正俊）

AGS推進室

AGSテクニカルミーティングの開催案内

本学では、マサチューセッツ工科大学（MIT）、スイス連邦工科大学（ETH）、及びスウェーデンのチャルマーズ工科大学と共に、環境保全を図りつつ地球規模での持続的発展を求める国際学術協力、AGS（Alliance for Global Sustainability）活動を推進しています。

AGSでは今後は4大学間の連携を緩やかなものとし、地域の活動を強化するという方針が決定されました。そこで、本学では東アジアを代表する大学や研究機関とのネットワークを構築し、東アジアに関係した研究・教育活動を重視することとなりました。

今回、4大学のAGS関係者、東アジアの大学・研究機関、AGS助成企業、AGSの提案する研究・教育プロジェクトに興味を持つ企業・団体などを対象に、AGSテクニカルミーティングを本学主催のもと下記のとおり開催いたします。テクニカルミーティングでは、東アジアにおける持続可能な発展を目指した研究プロジェクトの提案、4大学の重点テーマである、近未来を対象にしたエネルギー研究とその成果の教育への応用の提案、今後の産学間の連携、AGSと関連する学生の活動を中心に議論される予定です。

詳しくは、下記AGSホームページのテクニカルミーティングの案内をご参照の上、ご参加いただきたくご案内いたします。参加ご希望の方は、ホームページの案内をご参照の上、事前登録をお願いいたします。なお、使用言語は英語です。

AGSテクニカルミーティング2004
(AGS Technical Meeting 2004)

●期日：11月15日（月）～16日（火）

●場所：駒場キャンパス

詳細は下記AGSのホームページをご参照ください。

●プログラム概要：

(詳細プログラムは変更になる可能性があります)

11月15日（月）

9：00～9：05 開会 住明正教授
(気候システム研究センター)

9：05～9：15 開会挨拶 佐々木毅総長

9：15～10：00 来賓挨拶
北京大学
ソウル国立大学
ベトナム国立大学ハノイ校
アジア工科大学院

10：00～10：30 来賓挨拶 澤昭裕教授
(先端科学技術研究センター)

地球温暖化問題の再検証－新たな国際的枠組みの構築に向けて

11：00～12：30 セッション1 先端科学技術の挑戦

・光触媒の応用展開 橋本和仁教授
(先端科学技術研究センター)

・アジアの大気汚染の問題 近藤豊教授 (同上)

・ネットワーク社会のためのエコデザイン
藤本淳教授 (同上)

14：00～15：30 セッション2

・アジア衛星観測ネットワークによる環境と災害のモニタリング 安岡善文教授 (生産技術研究所)

・柘植綾夫 三菱重工 常務取締役

・産業エコロジーによるサステナブルな建築の展開
野城智也教授 (生産技術研究所)

16：00～18：00 ワークショップ

18：30～21：00 レセプション

11月16日（火）

9：00～10：30 セッション3

AGS重点研究プロジェクト

・将来のエネルギー

11：00～12：30 教育と学生活動

・重点研究プロジェクト：教育

・海外サマースクール（タイ）の紹介

・東京大学Student Communityの活動

12：30～13：00 ワークショップのまとめ

13：00 閉会

●詳細案内：

<http://www.esc.u-tokyo.ac.jp/ags/TM2004/AGSTM2004.htm>

●登録：登録は上記詳細案内をご参照のうえ、10月29日（金）までに手続きをお願いいたします。なお、登録費用は無料です。

(連絡先)

AGS推進室 浅尾修一郎、島崎裕子
Tel 03-5841-7937 Fax 03-5841-2303
Mail asao@esc.u-tokyo.ac.jp
shimazaki@esc.u-tokyo.ac.jp

環境安全研究センター 福士謙介
Tel 03-5841-2974 Fax 03-5802-8887
Mail fukushi@esc.u-tokyo.ac.jp

第2回レーザーアライアンスシンポジウム開催のお知らせ

シンポジウム・講演会

先端的レーザー技術を駆使した計測・応用技術は、基礎科学のみならず工学の幅広い分野における先端的研究を推進する大きな原動力となっている。レーザーアライアンスでは、デバイス工学・ナノ光学・光物性・原子分光・反応化学等、専門分野を大きく異にする研究者が、レーザー技術を軸に結集し、専攻を超えた新たなレーザー応用技術の創造を目指している。シンポジウムでは、専門の研究成果を他の分野の研究者にわかりやすく解説いただき議論を交わすことで、レーザーアライアンスの輪をさらに広げ深めていきたい。皆さんの積極的な参加をお待ちしています。

●開催日時 11月9日(火) 13:30~17:45

●場 所 工学部11号館 講堂

●プログラム

13:30~13:35 開会挨拶 越 光男教授
座長 越 光男教授(工学系研究科化学システム工学専攻)

①13:35~14:05 単層カーボンナノチューブのCVD合成と光学特性の評価(工学系研究科機械工学専攻 丸山茂夫助教授)

②14:05~14:35 フリーラジカル化学とレーザ(工学系研究科化学システム工学専攻 三好 明助教授)

③14:35~15:05 熱レンズ顕微鏡とマイクロ・ナノ化学(工学系研究科応用化学専攻 北森武彦教授)

④15:05~15:35 半導体光制御デバイスと作製プロセス(工学系研究科電子工学専攻 杉山正和講師)

<10分休憩>

座長 五神 真教授(工学系研究科物理工学専攻)

⑤15:45~16:15 ナノフォトニクス:ナノ寸法の光加工と光デバイス、システムへの展開(工学系研究科電子工学専攻 大津元一教授)

⑥16:15~16:45 原子気体の量子エンジニアリング(工学系研究科総合研究機構 香取秀俊助教授)

⑦16:45~17:15 スピンエレクトロニクスの現状と展望(工学系研究科電子工学専攻 田中雅明助教授)

⑧17:15~17:45 電気分極と磁性の交差相関 -非相反光物性への応用(工学系研究科物理工学専攻 十倉好紀教授)

17:45~ 閉会挨拶 五神 真教授

ASNET(東京大学日本・アジア教育研究ネットワーク)シンポジウム「ASNETの将来計画」開催のお知らせ

シンポジウム・講演会

部局の枠を超えた研究者のボランタリーなネットワークであるASNETが創設されて3年。「日本・アジア」をキーワードにしてゆるやかに結びついたこのネットワークは、これからどのような方向へ向かうべきなのか。参加者全員で、考え、話し合うシンポジウムです。多くの方の参加をお待ちします。

●日時:10月29日(金) 17:45~20:45

●場所:医学系研究科教育研究棟13F 第3セミナー室(赤門から入り突き当たって右におれ、正面左手に見える新築の高層建築)

<プログラム>

17:45~18:15

羽田 正(東洋文化研究所教授)

「東京大学における日本・アジア研究とASNETの現状」

18:15~20:15

パネルディスカッション「ASNETの将来計画」

パネリスト:

牛島廣治(医学系研究科教授、国際生物医科学)

家田 仁(工学系研究科教授、社会基盤学)

小島 毅(人文社会系研究科助教授、中国思想文化学)

武内和彦(農学生命科学研究科教授・アジア生物資源環境研究センター長、生圏システム学)

司会:村田雄二郎(総合文化研究科教授)

20:15~20:45

古田元夫(副学長・総合文化研究科教授)

「東京大学における日本・アジアに関する教育の展望」

詳細は、ASNETのホームページをご覧ください:

<http://www.asnet.ioc.u-tokyo.ac.jp>

問い合わせは、ASNET運営委員会委員長 羽田正(内線:25883、mail:haneda@ioc.u-tokyo.ac.jp)、または、以下の各部局ASNET運営委員まで、お気軽にお寄せください。

渡辺知保(医学系研究科)

清水哲夫(工学系研究科)

吉澤誠一郎(人文社会系研究科)

木南 章(農学生命科学研究科)

村田雄二郎(総合文化研究科)

丘山 新(東洋文化研究所)

松井洋子(史料編纂所)

素粒子物理国際研究センター 一般公開講演会「素粒子物理の最前線」開催 のお知らせ

シンポジウム・講演会

素粒子物理国際研究センターは、「素粒子物理の最前線～最高エネルギー電子衝突装置を用いた素粒子物理の展開～」と題し、一般公開講演会を開催します。

講演会では、欧州原子核研究所（CERN）の世界最大の加速器「LEP」を用いた電子陽電子衝突実験を中心に、素粒子物理の最前線を紹介いたします。

- 日時 11月3日（水・文化の日）
13時開場、13時30分開演
- 場所 東京大学大講堂（安田講堂）
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
千代田線根津駅・丸の内線本郷三丁目駅・南北線東大前駅より徒歩10分
- 講演者・プログラム
小柴昌俊（東京大学名誉教授）
川本辰男（東京大学助教授）
萩原 薫（高エネルギー加速器研究機構教授）
駒宮幸男（東京大学教授）
- 参加費 無料
- 申し込み 不要。当日、直接会場へお越し下さい。
- 問い合わせ先 東京大学素粒子物理国際研究センター
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
TEL 03-3815-8384 FAX 03-3814-8806
E-Mail hisho@icepp.s.u-tokyo.ac.jp
URL <http://www.icepp.s.u-tokyo.ac.jp/info/kouenkai2004/>

総合研究博物館 『デジタルとミュージアム』展展示のお知らせ と内覧会・レセプション開催の報告

お知らせ

10月2日（土）から12月26日（日）まで、総合研究博物館新館で特別展示『デジタルとミュージアム』展を開催します。また旧館では特別展示『「Systema naturae」－標本は語る－』展を、2F展示ルームでは『須田昆虫コレクション』展を同時開催します。

本展では、デジタル技術を“時間と空間を越えて美と感動を伝える”有力な手段としてとらえ、その具体的な活用事例を展示します。そしてそれ以上に、デジタル技術活用手法の実験検証の場として本展に臨み、デジタルであるからこそできること、デジタルでなければできないこととして、展示内容や形態の新たな試みを、期間中にいくつか行う予定です。

デジタル技術は、博物資料や文化財などが持つ情報の発信手段として有効な技術です。本展を機にデジタルの面白さ、すごさを伝え、さらにこれらを通してデジタル技術を活用した新しい博物館の姿や、博物館の重要性・可能性を提示したいと思います。

オープニングに先立ち、10月1日（金）に当館で内覧会・レセプションが開催され、佐々木毅総長、森巨元総長、煙山力文京区長をはじめ学内外から多数の出席者があり、盛況のうちに終了しました。

『デジタルとミュージアム』展

会期：平成16年10月2日（土）～平成16年12月26日（日）
休館日：月曜日（月曜日が祝日の場合は開館し翌日休館）

『「Systema naturae」－標本は語る－』展

会期：平成16年10月2日（土）～平成17年5月8日（日）
休館日：月曜日（月曜日が祝日の場合は開館し翌日休館）
※平成16年12月27日（月）～平成17年2月4日（金）まで閉館

『須田昆虫コレクション』展

会期：平成16年10月2日（土）～平成16年12月26日（日）
休館日：月曜日（月曜日が祝日の場合は開館し翌日休館）

開館時間：10：00～17：00（入館は16：30まで）

会場：総合研究博物館

入場料：無料

問い合わせ：ハローダイヤル 03-5777-8600

URL：<http://www.um.u-tokyo.ac.jp>



「デジタルとミュージアム」展を担当した神内客員教授による挨拶の様子

情報基盤センター 秋季データベース講習会のお知らせ

お知らせ

10、11月にわたり、本郷・駒場・柏の各キャンパスにて、秋季データベース講習会を開催します。

冬学期開始にあわせ、専門データベースから文献管理ソフトまで、論文・レポートの執筆に役立つ幅広いラインナップをご用意しました。

各データベースの提供元から講師を招き実習形式で行いますので、実際にデータベースを操作していただきながら、すぐに活かせる文献調査のコツをマスターできます。皆様のご参加をお待ちしております。

●対象データベース

- ・ ScienceDirect (SD)
エルゼビア社が提供する科学・技術・医学・社会科学分野の電子ジャーナルシステム。
- ・ Web of Science (WoS)
ISI社が提供する引用文献データベース。通常のキーワード検索に加え、引用・被引用の関係をたどった検索が可能。
- ・ SciFinder
化学・医薬・生化学等の雑誌論文や特許論文、化学物質情報、化学反応情報などの情報群を利用できるオンライン検索サービス。研究者向けに工夫された包括的情報ツール。
- ・ LexisNexis Academic (Lexis)
世界各国の新聞、雑誌などの一般ニュース、企業プロフィール・財務情報、判例などの法律情報、医薬ジャ

ーナルを網羅した総合情報データベース。

- ・ Journal Citation Reports (JCR)
論文間の引用データから算出されたImpact Factor (文献引用影響率) などが調べられる学術雑誌評価ツール。
- ・ EndNote
学術文献の情報検索と検索結果のダウンロードファイルを管理する文献管理ソフト。論文執筆の際の引用文献欄と参考文献リストの自動作成が可能。

●詳細情報および問い合わせ先

各キャンパスでの会場、申込方法等については以下をご参照ください。

<本郷>

秋季データベース講習会のお知らせ

<http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/dl/news/db2004au.html>

情報基盤センター学術情報リテラシー係

literacy@lib.u-tokyo.ac.jp 内線 22649

<駒場>

駒場図書館HP

<http://lib.c.u-tokyo.ac.jp/news.html#koshu>

駒場図書館 参考係

sanko@lib.c.u-tokyo.ac.jp 内線 46093

<柏>

柏図書館HP <http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/kashiwa/>

柏図書館 情報サービス係

kashiwar@lib.u-tokyo.ac.jp 内線64224

●スケジュール

月	火	水	木	金
10/25	10/26	10/27	10/28	10/29駒場 SD 13:20-15:20
11/1	11/2本郷 SciFinder 15:30-17:00	11/3 休日	11/4駒場 Lexis 16:20-17:50	11/5本郷 EndNote 15:00-16:30
11/8	11/9本郷 Lexis 13:00-14:30	11/10	11/11柏 JCR 10:30-11:30 WoS 13:30-15:00 EndNote 15:30-17:00	11/12駒場 WoS 14:40-16:10 JCR 16:20-17:20

人事異動（教員）

発令年月日	氏名	異動内容	旧（現）職等
（退職）			
H16.9.30	小塚 裕	辞 職	大学院医学系研究科助教授
//	原澤 亮	// （岩手大学農学部教授）	大学院医学系研究科附属疾患生命工学センター 研究基盤部門動物資源研究領域助教授
//	小野謙二	//	大学院工学系研究科助教授
//	浅井健二郎	// （九州大学大学院人文科学研究 院教授）	大学院人文社会系研究科教授
//	佐々木 晶	// （大学共同利用機関法人自然科 学研究機構国立天文台教授）	大学院理学系研究科助教授
//	西田生郎	// （埼玉大学理学部教授）	//
//	中島春紫	//	大学院農学生命科学研究科助教授
//	坂本哲夫	//	生産技術研究所助教授
H16.10.1	陳 弱水	平成16年9月30日限り任期滿了退職	大学院人文社会系研究科教授
（採用）			
H16.10.1	山室 恵	大学院法学政治学研究科法曹養成専 攻法実務系講座教授	
//	富樫一巳	大学院農学生命科学研究科教授	広島大学総合科学部教授
//	柳澤修一	大学院農学生命科学研究科助教授	岡山大学資源生物科学研究所機能開発・制御部 門助教授
//	中山幹康	大学院新領域創成科学研究科教授	東京農工大学大学院連合農学研究科教授
//	高木紀明	大学院新領域創成科学研究科助教授	総合研究大学院大学先導科学研究科助教授
//	木下賢吾	医科学研究所附属ヒトゲノム解析セ ンター助教授	大阪大学蛋白質研究所特任研究員（客員助教授）
//	森本一夫	東洋文化研究所助教授	北海道大学大学院文学研究科助教授
//	金道浩一	物性研究所教授	大阪大学極限科学研究センター教授
（昇任）			
H16.10.1	小澤一雅	大学院工学系研究科教授	大学院新領域創成科学研究科助教授
//	田中雅明	//	大学院工学系研究科助教授
//	小関敏彦	//	//
//	重藤 実	大学院人文社会系研究科教授	大学院人文社会系研究科助教授
//	伊庭齊志	大学院新領域創成科学研究科教授	大学院新領域創成科学研究科助教授
//	宇垣正志	//	//
（配置換）			
H16.10.1	西村義樹	大学院人文社会系研究科助教授	大学院総合文化研究科助教授
//	中村雄祐	//	//
//	廣瀬啓吉	大学院情報理工学系研究科教授	大学院新領域創成科学研究科教授
//	高木堅志郎	生産技術研究所基礎系部門ソフト マター物性分野教授	生産技術研究所物質・生命部門ソフトマテリア ル分野教授

人事異動（教員）

発令年月日	氏名	異動内容	旧（現）職等
//	渡邊勝彦	生産技術研究所基礎系部門材料システム学分野教授	生産技術研究所情報・システム部門材料システム学分野教授
//	岡野達雄	生産技術研究所基礎系部門真空物理工学分野教授	生産技術研究所物質・生命部門表面物理学分野教授
//	黒田和男	生産技術研究所基礎系部門量子光学デバイス分野教授	生産技術研究所物質・生命部門量子光学デバイス分野教授
//	藤田隆史	生産技術研究所機械・生体系部門機械制御工学分野教授	生産技術研究所情報・システム部門スマート構造学分野教授
//	木下 健	生産技術研究所機械・生体系部門海洋空間利用分野教授	生産技術研究所人間・社会部門海洋空間利用分野教授
//	今井秀樹	生産技術研究所情報・エレクトロニクス系部門情報ネットワーク分野教授	生産技術研究所情報・システム部門情報ネットワーク分野教授
//	石井 勝	生産技術研究所情報・エレクトロニクス系部門電力エネルギー分野教授	生産技術研究所人間・社会部門電力エネルギー分野教授
//	七尾 進	生産技術研究所物質・環境系部門無機材料科学分野教授	生産技術研究所物質・生命部門機能性無機材料科学分野教授
//	荒木孝二	生産技術研究所物質・環境系部門有機材料学分野教授	生産技術研究所物質・生命部門生体機能工学分野教授
//	藤井 明	生産技術研究所人間・社会系部門数理形態学分野教授	生産技術研究所人間・社会部門都市情報工学分野教授
//	藤森照信	生産技術研究所人間・社会系部門都市・建築史学分野教授	生産技術研究所人間・社会部門都市・建築史学分野教授
（出向）			
H16.10.1	佐藤 仁	タイ天然資源環境省天然資源環境政策計画局	大学院新領域創成科学研究科助教授

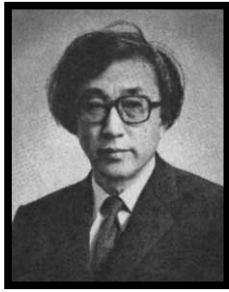
※退職後又は採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。

溪内 謙 名誉教授

溪内謙先生は、平成16年2月13日（金）、逝去されました。享年80歳でした。

先生は昭和22年に東京帝国大学法学部政治学科を卒業され、大学院、社会科学研究所助手を経て、昭和26年に名古屋大学法学部助教授に就任されました（昭和32年に教授に昇任）。そして昭和43年に本学法学部教授（比較政治論担当）に招聘され、以来、昭和59年に停年退官されるまで16年間、本学において研究教育に従事され、政治学の発展に多大な貢献をされました。学内行政面でも、大学院法学政治学研究科合同専攻会議主任、全学の図書行政商議会委員長などを務められました。停年後は、千葉大学法経学部教授、帝京大学文学部教授を務められ、また晩年に至るまで研究を飽くことなく続けられました。

先生は当初行政学を専攻されましたが、早い時期からソ連政治史という未開拓な分野の研究に取り組み、イギリスのE・H・カー、ソ連のヴィクトル・ダニーロフ



らとの交流を通して、世界的にみても高水準の業績をあげられ、日本におけるこの分野の基礎を築かれました。その成果は「ソヴィエト政治史」「スターリン政治体制の成立」（全4巻）などにまとめられ、また最後の病床にまで原稿を持ち込まれた遺著「上からの革命」の刊行も予定されております。

先生のお仕事は、ややもすればイデオロギー的価値判断が混入し、政治的党派性に引きずられがちなソ連政治史という分野において、徹底した原資料主義と実証的な資料批判の精神を貫いて、この分野でもアカデミックな研究が可能だということを身をもって示した点において画期的な意義を有するものです。それと同時に、スターリン時代の歴史的解明という課題は現実政治と現代史への強烈な関心に支えられたものであり、その強い関心と厳正な学問的禁欲との間の激しい緊張こそが、先生の重厚な研究活動を支えたといえることができます。

ここに先生の卓越した功績とお人柄を偲ぶとともに、謹んで哀悼の意を表します。

（大学院法学政治学研究科）

古賀 憲司 名誉教授

名誉教授古賀憲司先生は、平成16年7月25日（日）午前2時00分に肺癌のため逝去されました。享年66歳でした。通夜は親族のみで執り行われ、葬儀・告別式は台東区上野公園の寛永寺輪王殿で行われました。寛永寺輪王殿には、古賀先生を偲んで多数の方々が参列され、各方面でご活躍中であられた先生の若すぎのご逝去を悼みました。



先生は、昭和13年2月11日福岡県に生まれ、昭和35年3月東京大学薬学部を卒業、同年4月同大学大学院化学系研究科薬学専門課程修士課程に進学、昭和37年3月に修士課程を修了後、昭和39年1月同博士課程の途中で東京大学薬学部教務職員に採用されました。昭和40年6月に同大学薬学部助手に昇任し、昭和42年12月に薬学博士の学位を授与され、昭和43年4月助教授、昭和51年4月に東京大学薬学部教授に昇任となり、平成10年3月に停年退職、同年5月に東京大学名誉教授の称号を授与されました。東京大学ご退官後の平成10年4月からは、奈良先端科学技術大学院大学教授に就任、平成15年3月に同大学を停年退職、同年4月に奈良先端科学技術大学院大学名誉教授の称号を授与されました。

東京大学においては、総長補佐、薬学部附属薬用植物園長、評議員、薬学部長を歴任され、東京大学の運営と発展に寄与されました。奈良先端科学技術大学院大学においても、物質科学教育研究センター長、評議員として同大学の運営と発展に貢献しました。

先生は、永年にわたって有機合成化学の教育および研究に務められ、研究業績は非常に多岐にわたりますが、特に、新規不斉合成反応の開拓、生物活性天然有機化合物の不斉全合成、分子による分子認識の化学のそれぞれの研究領域において先駆的研究を行いました。

第一に、アミノ基や芳香族基の隣接基関与を利用した鎖状化合物の立体化学制御に関する先駆的な研究を行い、例えば、アミノ酸の一種であるL-フェニルアラニンから医薬品クロラムフェニコールやノルエフェドリンの合成、やはりアミノ酸の一種であるL-グルタミン酸やL-アラニンから生体内で重要な働きを担う糖であるリボースやヘキソースの立体選択的な合成法を確立しました。後者の研究は、糖以外の原料から糖を合成した初めての例でした。

第二に、アミノ酸から誘導される光学活性アミン類をキラル塩基として用いたリチウムエノラートの合成と反応の不斉化、不斉触媒化の研究で、先駆的かつ本質的な業績を残しました。特にリチウムへのキレート形成によって構築される光学活性リチウムアミドが、ケトンの α 位プロトンを選択的に識別して、きわめて有用な反応剤であるリ

チウムエノラートをエナンチオ選択的に生成できることを見いだしました。NMRやX線結晶構造解析を駆使して、反応機構を理解するという点においても大きな功績を残しております。以上の根源的な知見をもとに、光学活性リチウムエノラートを用いた不斉アルキル化反応の開発とその不斉化やプロトン化反応への展開をおこないました。特に、触媒量の光学活性ポリアミンを用いるケトンの触媒的不斉アルキル化反応は、不斉源の形の美しさ、反応機構、達成されるエナンチオ選択性のいずれにおいても有機合成化学における金字塔であり、「古賀アルキル化反応」として長く継承されていくものです。

第三に、有機分子によって有機分子を取り込む分子認識系の構築と人工酵素モデルへ分子の設計と合成において先駆的研究を行いました。クラウンエーテルやシクロファンといった大環状化合物を母核として、その上に官能基を組み込み、分子認識能と触媒能を有する人工酵素分子を合成し、これらの概念から、ペプチド合成反応や炭素-炭素結合形成反応を促進する不斉触媒の創製を行いました。

これらの研究業績はいずれも、高い独創性と洞察力、研究哲学に裏打ちされた「古賀先生にしかできない」レベルの研究でした。さらに重要なことは、古賀門下からは現在の有機化学や創薬を担う人材が学部や大学、研究機関、企業の壁をこえて極めて数多く輩出されており、このことは、先生の教育者としての品位の高さを顕著に物語っております。

これら一連の研究業績は、国の内外で高く評価され、昭和62年に井上學術賞、平成6年に日本薬学会学術賞、さらに、L-アミノ酸の不斉転写に基づく光学活性化合物の新規合成法の研究に対して、平成7年6月12日には日本学士院賞が授与されました。

我が国の薬学分野における学術行政への貢献としては、大学設置・学校法人審議会専門委員、学術審議会専門委員、中央薬事審議会専門委員を歴任し、指導的役割を果たしました。学協会への運営や発展にも尽力され、日本薬学会理事・副会頭、有機合成化学協会理事・協会誌編集委員長、日本化学会名誉会員等数多くの要職にありました。

現在、薬学部では、学校教育法および薬剤師法の改正によって、教育制度が大きく変わりつつあります。この変革期にあって、先生への斯界の要請や期待が大きかっただけに、先生の指導力を失ったことはわが国にとって大きな損失でありました。

終わりにあたり、名誉教授古賀憲司先生には、7月25日（日）付けで「従三位」「瑞寶中授賞」の叙位叙勲を賜られましたことを申し添え、ここに先生のご逝去を悼み、先生のご冥福をお祈り申し上げます。

(大学院薬学系研究科)

三極構造の外側

海洋研究所が40年あまり維持してきた研究船、白鳳丸、淡青丸が東京大学から独立行政法人海洋研究開発機構に移管されてから半年余りが経過しようとしている。同時に同法人に移籍した60名あまりの船舶職員も、多少とまどいながらも新たな職場に慣れつつあるようだ。移管後も海洋研究所はこれらの研究船の運航計画の策定および研究・観測に責任を持ち、共同利用研究所としての役割を継続している。文部科学省の強い主導によって進められたこの移管は、我々にとって苦渋の決断によるものだった。運航日数の増加という“おみやげつき”にせよ、今後これが我が国の海洋学の推進にどこまでプラスに働くのか、さらにはこのような移管のあり方が東京大学にとって果たして理にかなったものであったかについては、私はまだ確信が持てない。

法人化後の東京大学がその様々な施設や資源をどう維持していくかは大きな問題であろう。たとえば駒場、本郷、柏の三地区を除く東京大学の“飛び地”は全国に30箇所以上あり、その



総面積は三地区より桁違いに大きい。その多くはいわゆるフィールドサイエンスに関わる施設であると同時に、“経営上の成績”が思わしくなく、維持に苦勞している。しかしそれらは長年にわたって研究、教育の場であり続けてきたし、大学と地域社会、あるいは周囲の環境との接点の役割も果たしてきた。例えば我々は演習林が長く環境の“護り手”となってきたことをもっと誇るべきだろう。

経営を無視した大学運営のあり方が既に非現実的である以上、これらの学内の諸施設を全て無条件にそのまま維持すべきだ、などと言うつもりはない。何よりも関係者が知恵を絞り、こうした大学の資産のより魅力的かつ効率的な使い方を工夫していく努力が必要であろう。しかし万一にも、結果的にこれらの施設が一つ一つと切り捨てられていくようなことになった場合、その先に待っている“知の創造”とは果たして本来の意味の創造力と活力に満ちたものでありうるのだろうか。“三極構造”という言葉が強調されるにつけ、何やら薄ら寒い思いを禁じ得ないのは、“海育ち”の筆者の錯覚であることを望みたい。

木暮一啓（海洋研究所）

(淡青評論は、学内の職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。)

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、総務部広報課を通じて行ってください。

No. 1298 2004年10月13日

東京大学広報委員会

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号

東京大学総務部広報課 ☎ 03-3811-3393

e-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

ホームページ http://www.u-tokyo.ac.jp/jpn/index_j.html



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO